

●『東方』二八四号より

一九三八年、長江は五里霧のなか

ちゅうごく

阿部 幸夫

周而復の著作を搜して北京の書店を巡り歩くなんて、ほんと何十年ぶりになろうかと、北大の南門通りまでやってきた。目指すはビルの地下へ降りていく風入松書苑、北京でも心やすらぐ本屋である。書店めぐりはこれが四店目、王府井と西単、それに三味書屋と経巡って、半ば予想したとおり収獲なし。後世に語り継がれるきつちりとした歴史小説を残せる、そして残した、いつてみれば最後の作家でもあるこの人が世を去ったのは今年一月のことだった。とすれば中国現代史の転折点としての抗日戦争を、真つ向正面から描ききった記念碑ともいべき大河小説『長城万里図』全六巻（人民文学出版社）を、まともな書店ならきつと並べてもいよう、などと一方的に考えたわけである。頼りにできるのは此処だけと風入

松までやってきたのだが、なかば無駄足だった。

調べてもらおうとこの作家の作は、『散文集』四巻と、なんとも懐かしい『白求恩大夫』（邦訳『医師バツーン』、青銅社）、それに目指す『長城万里図』シリーズの第四部『太平洋的弘暁』が在庫し、書棚にありという。親切な書店員が二人がかりの搜索もむなく、ついに捜しあたらず。昨今の雑書ブームや武俠もの人気のまにに正統派文学作品は影薄く、この国にしてからがどうやら、あの八年の抗日戦争も、風化しつつありということか。逆らうすべもない時の流れ？に、いささか無然とはしてみたものの、いや待てよ、だからこそ、もういちどしつかり周而復を読んでもおこうと氣をとり直した。

こういう次第でこの一文は、原著『長

周而復著／竹内実監修／
日中21世紀翻訳会訳
長江——正義と勇氣の大海へ
（長城万里図2）上・下



A5判
上 348頁／下 330頁
晃洋書房 [各 2415円]

江還在奔騰』（一九八八）を座右において随時参照するという初歩的な作業を抜いて、訳書つまり日本語版だけを対象にするが、東京にもどって神保町界限で、図らずもシリーズ第四部と第五部『黎明前的夜色』を手にすることになる。前者が増刷り三千、後者は七千部あまり刷ったとある。必要あって所蔵する第六部『霧重慶』も印数五千部。つまりはそのあたりの印刷数量が流通しているということか。一抹のものの悲しさやら物足りなさが残る。

さて、小説の舞台となった時間・空間を確かめておきたいから、地図を用

意する。南京陥落の直後からの、とりあえずの抗日救国の象徴都市としての大武漢をめぐる攻防までが主旋律となり、長江一帯が舞台となる。スローガン風にいえば「武漢大防衛」である。たしか小学生だった僕の記憶では、地名で武漢三鎮、新聞には漢口作戦という活字が浮かぶ。時間にしては一九三八年の一カ年。抗戦第二年目といういいかたもある。いま手元に軍事秘密のゴム印を押した「武漢三鎮ニ於ケル重要施設要図」があり、当時の状況理解を助けてくれる。漢口市街の四つ辻には●印が何カ所かつられ、「●ハトーチカニシテ平時巡查ノ台トシテ利用シ有事ノ際ハ主トシテ道路ヲ縦射シ得ル如ク構築シ」云々、あるいは

「美孚洋行（米国）ニハ戦時用石油三〇〇萬ガロン貯蔵シアリ」、また空陸からの侵入のためであろう、「好目標六角塔」といった備考が書き足しされている。美孚とはスタンダード石油会社である。それ以上に有用な『現代史地図集』（中国地図出版社）もいい。武漢会戦要図などに目を凝らしながら周而復の筆の動きを追うなら、武漢に近い、長江北岸にある田家鎮要塞をめぐる彼我の死闘がいやでも脳裏を離れなくなる（下巻）。夫人連れで赴任していた、いわばのんびりした後方勤務のつもり要塞指揮官が、そのおかれた緊迫した状況を知らされるドキユメント風の語りなど、地図によりかき感情を移入しないふりをして読み流す

しかない。

＊

一九三八年、長江は五里霧のまったなかでもがいていた。あたり一面を閉ざす深い霧は中国人だけを取り巻いていたのではなく、むしろ長江すなわち中国をとり囲むすべての国際社会の關係式をがんにがらめにもしていた。作家は、濃霧のなかでの迷走を演出した群像をグループに分けて描き、その理由を問い、行為と言葉の乖離を解き明かしていく。日本の軍部と政府、中国指導者の主導権を巡る確執、国共合作の裏側にあるもの、西欧各国の世界戦略の関わる思惑とのからみ。すべての汚泥が長江に流れ込み、澱みになっていくのだが、だれも、ほとん

どだれもが霧を晴らす術を知らず、展望を欠き、右往左往を繰り返して、そんな年ではなかったか。戦争の行方がわからぬ混沌として、だれにも見えなくなつた。周而復の筆はその混沌を中国古代の歴史小説よろしく、すべて見せようとする。

戦争なのだから、出鼻をくじいてまづ有利な足場を確保する。隣国までわざわざ出向いてちょっかいをだした側としては、この電撃的優位を取つかりに嵩にかかつて自国に有利な条件交渉を即決させたい、これが日本の立場。ただし一枚岩ではない。なんとかここで踏みとどまって、理非を明らかにし国際世論を後ろ盾に、体勢立て直しをはかりたいのが、蒋介石の中国国民党政府。小説は、南京陥落は必至の予感のなか、漢口で開かれた最高国防会議の場面から劇的にはじまる。議長はのちに国論に背いて日本との面妖な和睦、まともな国民には耐え難い屈辱的な和睦を買ってでたドイツの大使トラウトマンによつてもたらされた日本

政府提案の和議七項目を検討議題にしていた。蒋介石はまだ南京から戻っていない。事実には即してはいえ当時この国民党の両巨頭は、できるだけ早く日本と妥協することが得策と考えていたと思つていい。この段階でふたりの思惑に差はない。だが、汪が武漢の地にあつて司会し、実力者の蒋介石は南京にあつて欠席する。歴史の、皮肉ないたずらだろうか。この書きだしは、刺激的だし、巧みに読む側を誘う。「抗日戦争を正面から全面的に書けるのは君しかない」と楼適夷（文芸評論家、当時は版元の編集主幹だったと思う）に慫慂されたのが執筆のきっかけだとか、「一般の読者には知られていない国民党の内部抗争をもっと書け」と柯霊（上海の劇作家）に後押しされたなど、友人たちの激励を明かす。あの混沌の時代を、嘘偽りなく後世に伝えたい、そんな思いが、書きだしから伝わる。

新しい根拠地が生まれていく描写はあつた。それが『持久戦論』によつて明るく明日をもつのである。軍国日本が周到に準備し、最大規模の軍事力を動員した漢口侵攻作戦にじりじりと後退をつづけ、一年近い歳月の後に、結局はまた武漢から撤退を余儀なくさせられる。面子をつぶされない和平の道は閉ざされてしまった蒋介石、それでも講和に望みを託す汪精衛をよそに、周恩来は『新華日報』最後の社説を書く。「最後の勝利を勝ち取るためには、どうしても持久戦の三つの段階を経なければならぬ」。徹底抗戦による救国が唯一の道であり、持久戦を経て中国は勝利するという苦しい道のりと前途の明るさを示した毛沢東の『持久戦論』を受けての、民衆鼓舞のことばだった。国民党の親日派（低調クラブなど）の亡国和睦も、王明らの速勝論も退けるもので、戦略的な防御・対峙・反攻を経て勝利するという、鋭い予測である。同時に戦火の広がりに直面して動揺する民衆にも、はっきりとした希望をもたせる分析でもあつた。「武漢を守りきることがで

きなくとも、長期の抗戦をつづけることができる」。抗戦の臨時首都である武漢は落ちた。でも長江は悠々と蕩々と流れつづけている、そう結んだ。

南京から武漢まで。一九三八年とはどういう年であったのか。作家が膨大な資料をこなしきったか、複雑きわまる歴史事実を消化しきれたかどうか、おそらく議論の余地もあろう。

かれは、日本の上層部が目標を見失い、迷い、揺れたことを書いている。池に一石を投げれば水紋はひろがる。日本軍部の「満州」処理以来の愚行は愚行を呼び、水紋はさらにひろがるが、奢る勝者はそれを収斂させる術をもたない。「犯す」ことの没義道を恥じることもなければ、気づく気配もなく、しかも近衛声明は「国民政府を相手にせず」などと傲語した。参謀本部は多田駿を立てて早期和平を画策したというが、作家はその効果を少し水増しして過大に評価したかも知れない。北にロシア対策という難問を抱えて有効策をもたない日本軍部のいら

だちでしかなかったのである。

中国政府も迷い、揺れたと書いた。迷いの場面は、とくに親日・知日派をもって任じる知識分子のなかに蔓延したと、かなり詳しく語られている。陶希聖・胡適・梅思平らが物静かに、秘やかに、トーンを低めて時局を案じるから「低調クラブ」なのだという自嘲は胡適の命名だったと、のちに周仏海は苦笑しつつ明かした。親日派がリードする中国カイライ政

権構想が、陰に陽に膨らみを見せだした、そんな抗戦第二年目にはいつていた。

だれもが先を見通せない「迷い」の時代にも、新しい時代を創るエネルギーが絶えることはない。中国は土地と人口という自然の利点を生かし長期にわたる抗戦の戦略を編みだしていく。中国の唯一の希望は持久戦しかないと決意が、遊撃隊を生み、根拠地・辺区を育てていったのもこのころであった。

北伐から一〇年を経て、この危急存亡の瀬戸際にあつて、なおも地方軍閥の淘汰を目指す蔣介石の執念がすごい。とても肯定はできないが、山東の韓復榘、四

川の劉湘をはじめとして、片端から死地に追いやって、中央の軍と党を固めていく辣腕は無類である。毛沢東の軍隊も、同じにしか見えなかったに違いない。

この作品をどう位置づけようか考えてみた。かれ周而复はおそらく長編の散文詩を淡々と綴ったのではないか。もともと詩人として出発したかれは、また『史記』の散文世界を目指して歩んできた作家である。司馬遷に強く影響されてきたことを口にもする。晩年、つまらぬとばかりをうけて党籍を剥奪されながら、記録者の伝統を受けついで、黙々と推敲の筆をとり、改稿につとめた。全六巻、三七五万華字。本書はその六分の一である。

最後になったが、原著にはない六六項の「小見出し」と、六幕に仕立て、冒頭にそれぞれ千字ほどの「あらすじ」を付した編者の苦心は親切。複雑な状況をぎつしり詰め込んだ中身の理解を助けてくれる。